
滅神創世記by幼稚園児

天羽ひのわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

滅神創世記by幼稚園児

【Nコード】

N2666E

【作者名】

天羽ひのわ

【あらすじ】

オッサン（「まだオッサンじゃない！」）と幼稚園児と高校生のギャグありシリアスありの現代風ファンタジーです。グダグダ感満載ですが暇な時のお供にしていただければ嬉しいです。

(前書き)

天羽の書いた初めての小説なので至らない点が御座いましたらご忠告お願いします (< >)

あともしかしたら苦手な方にはグロく思われるかもしれません…
ご注意ください (。|。)

月が輝きだした高層ビル街。中でも一際高いビルの屋上に、満月を背にした人影が2つ。一人は男のようだ。黒髪に黒いスーツ。黒いネクタイに黒い革靴。よく磨かれているようでツヤがある。

フー……

紫煙を吐き、空を見上げる。目が片方、前髪で隠されていた。

「遊馬ア、見つけたぜエ」
隣から声がした。

「……………どつちだ？」

目線をそらすことなく答える。

「あつちだア。えエーつとオ、右。」

「……………」
指さした方へ目をやる。5つ向こうのビルの横を、歩いて行く人がいる。

「ありゃア憑かれてからそう経ってねエなア。まだ眼が生きてるぜ

エ。
「

男の腰ほどの背丈もない相方が話を続ける。

「^み実の場所は腹のド真ん中だア。まだ間に合うんだからア、殺さね
エようにしるよオ？」

「……了解」

友人の忠告を一通り聞き終え、素直に承諾の意を伝える。煙草の灰
を落として、今だ指さしたままの相方にチラと目を向け言った。

「………言いたいことはわかったが、お前がさっきから指さしてン
のは右じゃなくて左だ。阿呆。」

言い終わってニヤリと笑うと、遊馬と呼ばれたスーツの男は、ター
ゲットを追い掛けて行った。

「…………チツ」

ここのところずっとイライラしている。今日も残って補習だった。昨日も。その前もだ。

教師はたいして偉くもないクセに人を見下す。あの脂ぎった顔を向けられると吐気がする。

気に入らない学校。

学校だけじゃない。

家庭だって気に入らない。

周りの人間の、なんでもない仕草に無性に腹がたつ。

いつたい俺はどうしたんだ

ついこの前まではなんともなかった。父は面白いし、母は優しい。教師だって、尊敬していた。だが、この頃はそれらを壊したくて仕方ない。

殺したくて、仕方ない。

だめだ。さつきから、人を見る度どうやって殺そうか考える。頭の中では、血しぶきと断末魔の悲鳴だけがこだまする。俺はどうかしてる。とにかく、人を見たらだめだ。

人混みを避けて路地裏に入り込む。

.....!!

しまった。誰もいないつもりで入ったが、人影がある。しかも一人。背丈からして子供のようだ。

なんでこんな時間に子供が？.....

そう思う前に、頭はひとつの

考えで埋まってしまった。

格好ノ餌食ダ。

満月が、高校生男子と子供を照らす。子供は、幼稚園の制服を着ていた。紺のリボンが巻かれた青い帽子をかぶり、胸には ドリアン幼稚園すみれ組 相沢はるき と書かれたワッペンをつけている。形はチューリップのようだ。

小さな影に優しく微笑みかけ、一步近付いた。

怖がらせてはいけない。逃がすわけにはいかない

微笑みを崩さず、また一步。子供は逃げる様子を見せない。

大丈夫だ。いける。あと十歩 五歩 三歩 二

歩

少年の手が園児の首にのびる。頭の中は子供の発するであろう悲鳴だけが鳴り響く。もはや良心の葛藤などない。

細く白い首に手をかけ、両の親指で思いきり押し潰した。

悲鳴が、ない。

予想してたハズの甘美な喜びも、ない。

子供の目が見開かれ、少年を見つめる。手にさらに力を込めると、半開きだった口がゆっくりと鮮やかに弧を描いた。

「お兄ちゃん

最後の審判が

下されたぜエ??？」

ドスッ!!!

.....!!!!!!?

刺さっているのは

刀？

しかも、俺の

腹に、だ。

後ろを振り返る。黒スーツの男が、眉ひとつ動かさずに俺を見る。手に握った刀には、ゆっくりと血が伝い始めていた。

葬儀屋みたいだな。

なんだかおかしくなって、笑った。

黒スーツの葬儀屋も、血溜りを作る俺を見て、笑って言った。

「…………お前は有罪だ。阿呆。」

…………どこだ？…………ここは…………

先ほど襲われていたちよっぴり不良な高校生、佐藤幹彦（みきひこ）は重たい瞼を開いた。

「…………お？起きたか。」

「おい遊馬ア、ちゃんと押さえてろって

「イヤアアアアア！！！まだ刺さってンじゃん！！！！まだ刀残ってンじゃん！！！！貫通してンじゃん！！！！！！」

「おいおいだからお前動くなって

『ああ〜うぜエ。まじうぜエ。なんかアボクもう腹立ってきちやっ
たア。』……………ブチブチブチピチッブツチイッ！！！！

アギヤアアアアアア！！！！！！

「いいかア？俺たちはためエを助けようとしてたんだぜエ？はつきり言つてエ、お前あのままだとピンチだったんだよオ。」

俺は今、仁王立ちしてる幼稚園児の前に正座させられている。刀はさつき抜いてもらったのだが（別に痛みはなかった）、まだなんか刺さってるような感覚に落ちいってしまう。無意識に腹を撫でさすりながら言い返した。

「危なかったって……………刀刺してたのはあんたらだろ？俺を人生最大のピンチにしたのはあんたらだ。」

「いやいやいやいやア。ちげーよオ。危なかったのは刀じゃなくつてエ、俺がブチツてやったヤツの方だぜエ？」

「……は？え……つと……」

「はるき だよオ。相沢はるきィ。んでエ、こっちのおっさんが遊馬 だぜエ。」

「須藤遊馬だ。ちなみにまだおっさんじゃない。」

横から声がした。見てみると、黒スーツが刀についた血を拭きとっているところだった。

「……俺は佐藤幹彦。で、ブチツてやったヤツの方が危なかったってどういことだ？はるき君」

……あれ？返事がない。……黒スーツの遊馬さんが青ざめた顔でこっちを見る。

「……あの、はるきく『俺様を君づけで呼ぶたアどオいっ了見たア？幹彦くんよオ。』」

「…え？」

かわいい五歳児の顔に青筋が浮き、半分ほどに影ができてる。背中に変な汗がつたい、遊馬さんに助けを求める。

「え…ちょ…あの、はるき君？どういうこと？えっ？待って？そのハンマーどっから出したの？なんかでかくない？つか、笑わないで？ね？お願いだから、ニヤニヤしないで？…待って待って待って…！！ちょ…！！振り上げないでええええ…！！遊馬さんっ！助けて…！！ちよつとこのバイオレンス園児止めて！？つか、はるきく…はるき様もやめて…！！お願いだからピコピコハンマーで我慢して…！！…イヤアアアアアア…！！！」

………こ…ひこ…みきひこ…

………あれは…じいちゃん…
………幹彦

………じいちゃんだ…

………鼻血が出たときは…首の後ろを叩いちゃ…

………いかんぞ…

………！??????

ガバツッ

「じいちゃああああん！！！！！！」

「うるさい」バシッ

うおお！？首の後ろを叩かれた！！

「何すんだ！せつかくの死んだじいちゃんのアドバイスを……………
って俺鼻血出してねえええ！！じいちゃん意味ねえじゃん！！！！！！」

そうやって俺が一人ジタバタしていると、

「ほらよ」

コトンッ

「……………なんスか？これ……………」

刀を拭き終わったらしい遊馬さんが、俺の方へ丸い物を転がした。
全体に茶色がかっていて、真ん中につつすらと瞼？らしきものがある

る。閉じた瞼を、縦に刀傷が貫いていた。

「エデンの林檎」

遊馬さんがぶっきらぼうに答える。

「????????」

いまいちわからない。

「てめエ高校生だろオ? 『創成記』くれエ知ってンよなア?」

何の反応も示さない俺を見かねて、(クソ)はるき様がしゃべりだした。

「エデンの林檎つてのアなア、言ってみりゃア 『創成記』の『善悪の知識の実』なんだア。」

「それって『アダムとイブ』の……」

「そオ。あの喰ったらダメよ。って神様に言われてた実さア。」

「……………ここにその実がある意味もわかりませんが……………その実のどこがヤバインスか?」

いまいち納得しないながらも、聞いてみる。

「それはア……………なんかもうボク説明す
んのダルくなっちゃったア　遊馬ア〜代わってエ〜」

「……はあ？」　「こんなときばかり5歳に戻るとは……………
ホントわがままなガキンチョ……………いやいやおぼっちゃまだ……………
……………これでいいっスか？……………そろそろ青筋ひっこめてくださ
い。」

なにはともあれ、遊馬さんが説明しだす。

「……………この実は、人間に寄生する。体に根をはっちまうんだ。寄生
された人間は、殺人願望や、破壊衝動、人間不信とか、まあいろいろ
よろしくない症状が出る。実は、人間のそんな負の部分を好み、
そこから栄養を得る……………」

「……………成長するってことっスか？」

「そうだ。成長しきったら、体中にめぐらした根で人を操って悪戯

に殺しを繰り返す。なかには、体突き破って別の人間に乗りかえるヤツもあるがな。」

「…んな、そんなこと信じられるわけないじゃないっすか…。」

どう考えたって、この実にそんな力があるなんて思えない。それに、そんな危険な実が存在するなら国が放つとくワケがない。

「信じるも信じないもオ、この実はさつきまでためエの腹に張り付いてたんだぜエ？根だって深くまではってたさア。だからア遊馬はアこの実を殺すためにためエごと刺したんだよオ。」

自分の腹を見してみる。刀傷はあるが、実が張り付いてたような痕はどこにもない。

「……………あんたら頭がおかしいんじゃない？『よオク思い出してみろオ。遊馬に刺される前、ためエは俺様に何をしようとしてたア？』」

……………！……………！

そうだ……………

「俺は……あんたの……首……絞めて……殺そうと……」

「てめエのその行動がなによりの証拠さア。いろんなヤツを殺した
いと思つたるオ？ 実に取り憑かれたらアどんなヤツだって気が狂つ
た殺人鬼になつちまわア。」

「でも……じゃあなんでこんな物がこの世界にあるんだよ！??」

「……『ゲーム』だ。……人間を餌にした、な。」

遊馬さんが淡々と言った。

「なぜ神がアダムとイブに『決して食べてはならない』知識の実を
わざわざ授けたのか。……お前はおかしいと思わないか？ それも同
じ理由さ。神が考えた暇潰しのゲームなんだよ……。創成記で神はア
ダムとイブが実を食わないかどうか、もし食ったら、その後どうな
るか。それを眺めて楽しんだんだ。今も、神は上から眺めて楽しん
でるはずだ、誰が実に取り憑かれるか、取り憑かれたヤツが誰を殺
すか、どんな殺し方をするか、な。」

「……そんな……」

「確かに俺達人間を作ったのは神だ。でも、だから神が人間の味方だなんて思わない方がいい。結局、俺達を作ったのも、時々奇跡を起こしたり、天罰を下したりするのもみんなヤツの気まぐれ、そもそもこの地球自体がおもちゃなんだよ。」

「……………なんで他の人は気づかないんだ……………？」

「見えねエからさア、この実がなア。俺や遊馬は特別なんだよオ。」

……………人間じゃねエんだ。この姿だつて作ってるだけさア。
まア、なんだア、言ってみりゃア……………ゲームの駒だア。俺みてエなヤツが何人も実と一緒に送り込まれたんだよオ。俺みてエな、エデンの林檎を主食とするヤツらがなア。林檎を食わなきゃ生きていけねエ、実を食うためにゃア取り憑かれた人間と闘って奪わなきゃならねエ。神にとっちゃアそれもまた一興つてヤツよオ。」

「……………じゃあ遊馬さんも？」 「俺は違う。人間だ。」

「少々普通じゃアねエけどなア。まア、そこが気に入って俺様の下僕にしてやったんだがねエ。」

「……！！？」

「離れる幹彦！！！」

チャキ

遊馬さんが刀を構える。あわてて実から離れようとするが

シユルシユルシユル

「……あ、足が！足捕まれた！！！」

無造作に転がっていたはずの実から、何十本もの根が伸びてきて、俺の足をからみとった。……又ル又ルして気持ち悪い。

「ちィっ……おい遊馬ア！！！！あの馬鹿実から切り放せエエ！！！」

タタタッ

スパンッ

走ってきた遊馬さんの刀が根を切り払う。

ビチャビチャッピチャッ

緑の汁が飛び、俺の足にかかった。

遊馬さんが俺を抱え、怯んでいる根から飛び退いた。

それと同時に、はるき様が実に殴りかかる ハンマーで。

ズツドオオオン！！！！

避けられたが、それでよりテンションが上がったらしい。

「ヒヤハハハハアツツ！！！！俺様から逃げるつもりかよオ؟؟グ
ツチャグツチャに叩き潰してやらアア！！！！」

まだ逃げようとする実の根を踏みつけて、自分の体ほどもあるハン
マーを力いっぱい振り上げた。

「くらえオラアアアアア！！！！」

ブンツッ

「はるき……メッ……！」

ピタアッ……！！！！

遊馬さんの声ではるき様が止まった。ハンマーと実の間には1cmもない。

ズコッ

遊馬さんが刀で床ごと実を突き刺した。

「……っ止めんなよオ！遊馬ア……！！しかも呼び捨てにすんじやねエエエ……！！」

………そこおおおお！……？……怒るとこそそこおおおお！……？『メッ』に関してはおとがめなしなのお！……？……つか、なにあんたも『メッ』でとまっちゃってんの！……？……？

「俺のことはア！はるきちやまって呼べって言ったるオ！……？遊馬ア……！！……！！」

ちやまあああああ！???え!?!ちやまあああああ!???

「すみませんでした、はるきちやま。」

てめえも呼んでんじゃねえええ!!!

「でもはるきちやま、お前いつもそうやって潰しちやあ『喰えねエ
エエ』って泣くじゃな

「あーもうなんなの!?!お前ら!?!なんで俺こんなに疲れてんの
!?!?つか、さっきの実なんで動いたの!?!?死んでたんじゃな
かったの!?!?」

つつこみと大事な質問を同じノリで吐き出した後、俺は二人がさっ
きまでとはうってかわって深刻な表情をしているのに気がついた。

「……………なに?どうしたんだよ……………」

俺までなんだか不安になってくる。

俺が異様な雰囲気を感じとったのに気がついたのか、はるきちやまがうつ向いたまま聞いてきた。

「……………お前エ、家族はいるかア？」

「……………？いるけど……………それがどうした……………？」

「……………仲ア、よかったかア？」

「……………ここんとこ話してなかったけど、悪くはなかったぜ？」

俺はここしばらく実に取り憑かれて人格が変わっていたせいで、親と全く言葉を交してななかった。

「……………」

はるき様は、また深くうつ向いた。

「……おい、俺の家族がどうかしたのかよ？」

「実に取り憑かれてたお前をぶつ刺してここに連れて来たのが昨日の夜だ。んで、今日はあと少しで終わる。つまりまるまる一日経っちまったってことだ。……お前に憑いてた実、やけに侵蝕が早いと思ってたが、さっき見た通り耐久性までありやがった。普通のヤツなら、一回だけ目を刺したら死ぬはずなんだ。……あれは、レベル弐だ。」

「レベル弐？」

遊馬さんがはるき様の頭を撫でながら続ける。

「……レベル弐は小隊で行動する。一番強いヤツを中心に3匹でなお前に憑いてたのが中心だ。」

「……じゃあ、俺に憑いてたってことは……」

「他の2匹がお前と近いヤツに憑いてる可能性が高い。お前の場合………家族、だな。」

心臓が痛いほど鳴りだした。寒くもないのに手足が震える。口の中に急にわいてきた唾を飲み込みながら言った。

「……助けに、助けに行かなきゃ!!! なぁ頼むよ!!! あんたらなら実を倒せるんだろ!??」

必死に頼んでみるが、はるき様は相変わらずうつつ向いたままで、遊馬さんはひどく冷たい目で俺を見た。

「……っ! なぁ!!! 頼むからっ……!!!」

「……無理だ。」

遊馬さんが言った。俺を真っ直ぐに見た目はそらさなかった。

「……え……なん……無理って……… どういうことだよ!!! なんで!!! 俺のことは助けてくれただろ!???」

「時間が経ちすぎた。お前にあんなに深く根付いてたんだ……… はるきちゃん、実を食べることは可能だが、媒体であるお前の家族は助

からん。」

「……………っ！…！」

助けにいかなきや……………！！俺だけでも！！！！

……………ダッ

そう思った俺は、ドアに向かって走り出した。

「待て！」

ッダンッッ！！！！

「…ちよっ、何すんだよ遊馬さん！！！！離せ！！！！」

遊馬さんはドアノブにかかっていた俺の手を掴むと、壁に叩き付けた。

「……………離せよ……………早く行かないと……………」

必死で抵抗してみるも、凄まじい力で両手首を押さえられていて動けない。前には遊馬さん、後ろは無機質な冷たい壁に阻まれている。

「…っ離せ『行くな。』」

「……………っなんでだよ!!!家族が危ねえんだ!!!こんなところで
のんびりしてられるわけねえだろうっ…!!!……………放……………っせえ!
!……………」

「……………!……………」

……………ドカツッ

俺は無我夢中で遊馬さんの腹を蹴った。痛みか驚きかで少し緩んだ腕の拘束を振りほどき……………

「……………ッばっ！！！！てめえやめろ！！！！」

自由になった手で遊馬さんの腰に差してある刀を奪った俺に、慌てたように遊馬さんが叫ぶ。それにかまわずに、俺は刀を振るった。

「……………そこ、退けえええええ！！！！」

シュッ

とっさに飛びのいた遊馬さんのYシャツが切れた。完璧に拘束の取れた俺はダッシュでドアを開け部屋をでた。

ビルの階段を急いで降りきると、生暖かい風が頬を撫でる。さつきまで掴まれていた手首はまだジンジンしていた。

よく見るとそこは通いなれた通学路だった。俺が刺されたところからそう離れていないとこにあいつらの住みかはあるらしい。遊馬さんの刀を握りしめたまま、自分の家へと走った。

きれいな満月に照らされて、灯りのすっかり消えてしまったマンシヨンがボウツとつかびあがる。その102号室のドアを力いっぱい引っ張った。

ガンッ

鍵がかかっているようだ。本来なら真夜中だし当たり前のことだ。だが、無性に不安になって、チャイムを押しながら狂ったようにドアを引っ張りまくった。

……ガンッ！！ガンガンガン！！！！ガンガンガンガンガンガン！！

！！！！！

「母さん！母さん開けて！！！！俺だよ！！！！ッ父さん！！！！いるんだろ！！！！開けてくれよ！！！！」

返事が、ない

……………寝てんだよ。……………そうだ。何てったってこんな時間に起きてるわけがない……………そうに決まってる……………さあ、鍵を出すんだ、俺……………ツカヤロウ……………震えんじゃねえよ……………ほら、いつも新聞受けに入れてあっただろう？……………俺が帰って来てない時は……………いつ……………だっ……………て……………

ない……………ない……………ない！！！！……………

「うああああああああああ！！！！！！！！！！」

ザンッ！！！！

「ツツ遊馬さんツ!? はるき様!？」

居間を転がって通り過ぎていったはるき様が慌てて戻って来ながら叫ぶ。

「幹彦オ!!! てめツばかやるオ!!! なんで抵抗しないんだよオ!!! 遊馬の刀だつて持つてンだろオオ!??」

心配してくれる時まで上から目線の小さな彼に、つい口元がほころんでしまう。

「……………ごめんはるき様……………俺もういいんだ……………。父さんも母さんも救えない…俺だけ生きるなんてできないよ……………」

俺は穏やかに笑って答えてみせた。追い掛けてきてくれて嬉しかった、と、ありがとう、を込めて笑った。

「……………フザケンじゃねエよオ!!! てめエの命は俺様が救つてやったんだア!!! もオ俺様のもんなんだよオ!!!……………死ぬとかア……………ンなア……………俺様そんなん許さねエからなアア!!!」

ハンマーを無茶苦茶に振り回し、強がりきれない目に涙を浮かべて嫌がっている。それでも俺を助けようとしなないのは、自分から助かることを望まない人間を助けたって意味がないのを実と戦^みってきた

中で知ってしまったからなのかもしれない。

見た目は子供なのに、命のやり取りの厳しさを知っている。誰よりも大人びなければならぬ。そうしないと、非情にならないと、はるき様は生きていけない。

それなのに泣きそうな顔をして人を助けようとするはるき様を見ていると、胸がチクリと痛んだ。

「……………いて……………」

はるき様より激しく転がっていった遊馬さんがやっと戻って来た。俺とはるき様との状況にチラと目をやって、何も見なかったように煙草に火をつける。

その目が、俺の両親は助けられないと言った時の目と同じで、『お前も救えない』と言われてるようだった。

身勝手な寂しさに思わずうつ向いた俺に遊馬さんが言った。

「……………死ぬつもりか。その化けもんと一緒に。」

「……………ああ」

うつ向いたまま、短く答えた。何の感情も込められていない声は、

俺の鼻をツンとさせた。

「……ッゆうまアア……幹彦が……死ぬって……どうにかしろよオ
オ」

動けないでいたはるき様が、遊馬さんにすぎる。

「いつも言ってるだろう。はるきちやま、お前には非情さが足りない。生を捨てた瞬間、もうコイツは幹彦じゃない。……お前の餌だ。」

「「……ッー!」「」

耳を疑った。遊馬さんは、はるき様に俺たちを喰わせようとしている。

一瞬恐怖が襲ったが、すぐに考え直した。

仕方ない。はるき様だって食べなきゃ生きていけない。仕方ない。はるき様のタメだ。仕方ない。俺が死んだら、はるき様のタメになるし、一緒にいられるから両親だって喜ぶ。仕方ない。これが一番いいんだ。仕方ない。俺は犠牲になるけれど。仕方ない。

考え終わって、決意を固めた俺ははるき様と遊馬さんを見た。

『食べていいよ』の合図だった。

なにもかも受け入れた様な顔をした俺を見て、遊馬さんの顔が変わった。

あれ？怒って…………

「いやだアアアアアアアア！！！」

びっくりした。慌てて遊馬さんから視線をそらすと、はるき様が泣いていた。

「うっ…ひく…なんで俺様がア…幹彦…食べなきゃいけないんだよ！！！！！！いやだよ…幹彦…食べてまで…生きたくないかないよ！！！！」

鼻を垂らしてグスグスいわせながら、はるき様は遊馬さんの足にしがみついた。

「…………はるきちやま、お前が喰わなきゃ幹彦はずっと人間襲い続ける化けもんになり下がるんだ。他にもいっぱい死ぬことになる。幹彦を喰うのはお前の役目だ。

決めたんだろ？『ただ実を喰らうために他の命を奪い続けるような化けもんにはなりたくない。』

神のヤローのおもちやにはなりたくない。

埋め込まれた殺しへの本能には負けたくない。神が殺すことを求めるなら、自分は救おう』ってな…………。お前俺にそう言ったよなあ？

だから俺はここにいるんだ。お前の役目を果たす力になる。お前の甘さをカバーする非情な刀になる。お前が間違えそうになったら、自分の欲求に負けそうになったら、切り殺してでもとめてやる。」

「遊馬……」

はるき様が俺を見た。その目はまだ涙で濡れていたけど、確実に何かを決意した目だった。

ゆっくりとした足取りでこちらに近づくはるき様は、いつもの子供らしさも、エラソーな態度も、かわいらしい無邪気さも、何もなかった。決意を固めた力強い目をしてはいるが、その目は真つ暗だった。光なんか少しも入ってなくて、ただただ涙だけを流し続けた。

……わかっている。

遊馬さんがさっき言ったセリフは、本当は俺に向けられてたつてこと。

わかっている。

自分は今、自分の運命から、人生から、逃げ出そうとしていること。わかっている。俺がしようとしていることは、ひどくはるき様を傷付けること。わかっていた。自分がしなくちゃいけないこと。わかっていた。俺と一緒に死んだって、父さんも母さんも喜ばないこと。わかっていた。俺がしなくちゃいけないことは……

「はるき様！！遊馬さんっ！！！！やっぱ俺生きる！！俺も闘っ！！」

「父さんも母さんも、このままじゃ可哀想だ。……早く解放してあげたい。」

「……そうか」

俺の答えを聞くと、遊馬さんは顔をひきしめた。はるき様ももう鼻は垂らしてない。

「いくぞオオてめエらアアアア!!!」

はるき様の雄叫びとともに、二人がつっこんできた。

「オラアアアアっ!!!」

ガキーン!!!

はるき様の渾身の一撃が、母さんが持ってた包丁を吹っ飛ばした。包丁は刃の部分が粉々になったうえに、破片が全て壁につきささっている。

あまりの衝撃に母さんの体までが吹っ飛んだ。襖を突き破って和室に消えていく。

その様子に気を取られていたら、いつのまにか遊馬さんが近くまできていた。刀振りかざして。もうホント近くまで。

「うおおおお！？遊馬さん何でこっち来てんの？！え、俺？！狙い俺？！違うでしょ！？狙うは実でしょ！？」

ヤバイ！！！死ぬ！！よりもよって味方に殺される！！！！…ってかさっき生きるって言ったばっかなのにこんなところで死ぬるか！！！！すっげえかつこ悪いじゃんか！！ああなんかめっちゃ気合い入ってるよ！！？切る気満々だよ！！？？

「…………ぬおおおおおおお！！！！」

『ぬおお』じゃねえええ！！！！

ヤバイ殺られる！！！！

「おらあああああああつ！！！！」
ブツツブチツブチツブ
チブチブチブチツツ

俺は渾身の力で体に巻き付いてた実の根をちぎった。寄生された父さんが慌てたふうに一、二、三步よろける。

ザシユツ

その隙をついて遊馬さんが父さんの体を突き破つてのびた全ての根を切り払った。

…なんだ、狙いは俺じゃなくて根だったのか…… ホントびっくりした 殺されるかと……

「やればできるじゃねえか」

刀をひと振りして緑の汁を落しながら遊馬さんが言った。ニヤリとした素敵笑顔つきで。

……ちくしょおおお!!!!

「ワザとやってたのか!? なんなんだあんた!! 一体何がしたいんだ!!!! つーかこんな緊迫した戦闘中にオチャメぶっこいてんじゃねエエエ!!!!」

さらに無駄にかっこいい笑みが気にいらなんだよちくしょおおおお!!!! ちよつとドキツとしちゃったなんて認めねえぞ俺は!!!!

俺が一人で悶えて(?) いると、遊馬さんが刀をよこしてきた。

「ん。」

「ん っ て遊馬さん、コレを俺にどうしろと?」

赤みがかった綺麗な刀。切味もいい（ドア斬っちゃったし）。もういくつもの命をうばってきたハズなのに、不思議と汚れた感じも禍々しい感じもしない。

「戦うのは俺達じゃねえよ。幹彦、こいつはお前の闘いだ。お前が自分の手で決着つけなきゃいけねえ。貸してやる」

差し出された刀を受けとる。それはズッシリと重かった。いつのまにかはるき様も側に来ている。

「幹彦オ、とりあえず実の根っこは全部千切つといてやったぜエ。これでもオあいつらが攻撃してくることは無エ」

「……後は直接実を殺すだけだ。目を斬ればいい」

俺はゆっくりと後ろを見た。攻撃手段を無くしてオタオタしてる実がいた。

「……ありがとう」

俺は遊馬さん達に礼を言った。もう簡単に殺してしまえるハズなのに、俺に任してくれた。実の……いや、父さんと母さんの最期を、俺に委ねてくれた。

「……父さん、母さん……」

バケモノみたいになっちまった両親は、俺の呼び掛けに反応してこ
つちを見た。襲ってくることはなかった。穏やかな、顔をしている
ような気がした。

「……いめん……」

ザシユッ

「……………なー遊馬さん。」

俺達は、また遊馬さんの家に戻ってきた。
ちよつとしたケガの手当てをして、今はゆっくりくつろいでいる。

「……………なんだ」

遊馬さんは俺に貸した刀を、また丁寧にふいていた。煙草の匂いが、いつものと違う。……………少し、線香臭かった。

「……………俺、行くところないんだけど」

「……………親戚にでも養ってもらえばいいだろう。」

遊馬さんは少しだけ刀を拭く手を止めて言った。

「……………なんて言って養ってもらうんだよ。親が『エデンの林檎』に殺されましたって?……………死体も無いのに……………」

父さんも母さんも、遺体はない。実が死んだと同時に腐り落ちてしまった。後に残ったのは、酷い腐敗臭と実だけだった。悲しかった。俺ははるき様が実を喰って遊馬さんが根の後始末をしている間、ずっと目をつぶっていた。腐り落ちてしまった両親を覚えないように。実に寄生されてしまった両親を忘れるように。両親のことを考えた時は必ず、笑顔を真つ先に思い出せるように。

極力俺に見せないように実を処理してくれていたはるき様が足にしがみついてくるまで、俺は自分が泣いていることに気付かなかつた。

「……………遊馬さん……………」

「……………」

「……………俺をここに置いてくれ。役に立ってみせる。今は体力と
かも無いけど……………でも……………でも俺……………」

『役にはたてない』

それがわかった上でのワガママだ。ワガママだって気づいているから、言葉は段々と尻すぼみになってしまった。

「……だめだ」

遊馬さんは静かに、でもはっきりと答えた。

「……そんな！！」死んだお前の両親が一番に望むことは、お前が幸せであることだ。不自由なく暮らし、ちゃんと学校に行って、自分の力で働いて、心から一緒にいたいと思える女を見つけて、平凡でいい、ただ、暖かい家庭を持つことだ。命の危険のない、安全な場所で暮らすことだ」

「……」

「それは、俺たちと一緒にいたんじゃ得られないもんだ。幹彦……親孝行、してやれ」

遊馬さんが言うことはもつともだ。普通に生きて、親が安心して見ていられるように生きる。これが一番の親孝行だ。でも……

「……遊馬さん、俺は親孝行するに値する息子じゃないよ。俺が憑かれた実のせいで父さんたちまで巻き込んで……あげくの果てに俺が殺したんだ。」

遊馬さんやはるき様なら、あれは殺したのではなく救ったのだと言ってくれるだろう。そうするしかなかった。そうしなければならなかった、と。それでも、俺がこの手で命を奪った。その事実が変わらない。

「カタキをうちたいとか、そんなんじゃないんだ。そんなこと父さんたちは望んじやないない。

ただ俺は、俺や父さんや母さんみたいな人をもう増やしたくないんだ。わけのわからないモノに、わけのわからないうちに殺されるなんてあつちやいけない。操られて、大事な人を傷付けるなんて悲しいこと、あつちやいけないんだよ。俺は知ってるんだ。エデンの林檎があること、絶対に防ぎようがない恐怖があること、今も…きつとどこかで襲われてる人がいること……。それを知らないふりして、自分だけ平和に暮らすなんてイヤなんだよ。そんな自分は誇れない。俺が俺を誇れないなら、父さんや母さんが誇れるような息子であるはずがないんだ。」

はるき様が静かだ。TVを見ているフリをしているが、俺の話に耳を傾けてくれているのがわかる。それに後押しされて、俺は続けた。

「俺が父さんや母さんの息子として自分を誇れないうちは、親孝行なんてできない。俺は俺のしなければならぬと思っただことをやり通したい。ちゃんとやり通して、自分で納得してから、胸はって親孝行するよ。親孝行するまでは絶対に死なない。頼む遊馬さん、俺をここに置いて欲しい。俺に、遊馬さんとはるき様の闘いを手伝わせて欲しい。……お願いします。」

全部言い切って、頭を下げた。遊馬さんは刀を拭くのをやめて俺をみていた。

「……言つとくが…守ってもらおうだなんて思っな。こつちの世界に足踏み入れる以上自分の命はお前で守れ。死なないなんて軽々しく言っけどな…そんな甘い世界じゃねえよ。誰にも絶対なんてない。俺にもはるきちやまにもんなこと言えねえ。……それでもいいな

ら勝手にしろ。」

「遊馬さん……ありが『いやったアアア!!よかつたなア幹彦オ!』!」

神妙な雰囲気がつ壊れた。これだから子供は困る。まあでも、俺がいることがそんなに嬉しいのかあ……なんて思うと悪くない。つられて俺までテンションがあがった。

「なあ遊馬さんつつ!!俺なんかやることねえかな!?なんでも手伝うからさ!!」

「何いつてんだ幹彦オ!!てめエの仕事は俺様の遊び相手に決まってるだろあ!??馬やれ馬ア!!」

「えっ!ちよ……マジで!?手綱つけるところから始めんの!?つか手に持つてんの何!?お兄さんに大きい声でいつてごらん!?え、それ鞭だよね!?それ鞭だよねエエエ!??しかも何脱がそうとしてんの!?あれか!?!馬の分際で服なんか着れると思うなよ的なあれ!?!」

「幹彦の分際で服なんか着れると思うなよ」

「そっちイイイイ!?俺!?俺自体がダメなの!??つてアアツ!!!いたっ!!素肌に鞭は痛い!!ちよつとオオオオ!!!なにこの子楽しそうんだけどオオオオ!?!ああああああ!!!」

「…ああ、あつたぞ幹彦お前の仕事『遊馬さん!!ちょっと待って見てこれこの状況見て!!お宅のお子さんヤバいってコレ!!痛いってコレ!!』」

「お前の仕事は『もしもし!!あれおかしいなあ!!聞こえてないのかな!?!もしもし!!』あーもつづるせえよお前。はるきちやま幹彦がウザいからやめなさい」

「幹彦てめエエエウゼエんだよオオオ!!」

「あーお前もウザいやめろ」

「グスツ…ひどいやひどいや遊馬のバカ…」

「幹彦お前の仕事だが『まさかのスルー!?!』黙って聴け」

「あーあれだ。まずははるきちやまに箸の持ち方を教える」

「」「…え?」「」

まあ何はともあれにぎやかな毎日が始まりそうです。by 幹彦

f i n .

(後書き)

ここまで読んでくださった方ありがとうございます！大好きです！
(オイ)

誤字脱字アドバイスなどありましたらよろしくお願いしますっ
>
()
<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2666e/>

滅神創世記by幼稚園児

2011年1月3日11時34分発行